

サラワク内陸部の狩猟民シハンによる野生動植物利用

加藤 裕美（京都大学大学院人間・環境学研究科）

・ 研究課題

本研究の目的は、サラワク現地社会における食用野生動植物利用の実態を明らかにすることである。具体的には比較的伐採の影響の少ない、森の中に孤立した集落を持つ狩猟採集民シハンを対象に、野生動植物利用を、利用種類、頻度、採取場所、販売価格の点から生態人類学的に分析を行なった。これらの分析により、現地住民が野生動植物の利用に際して、どのような生態学的、社会的利用体系を持っているのか検討する。また聞き取り調査によって、野生動植物利用の歴史的な変遷にも着目する。

・ 調査地と方法

調査対象のシハン族はラジャン川上流ブラガに位置する。調査方法は野生動植物の利用種類、頻度、採取場所、採取形態、販売頻度、販売価格についての聞き取り調査と参与観察、同行調査、標本による同定によって行なった。歴史的な変遷については高齢者への聞き取り調査によって行なった。

・ 調査結果

① “獲得” —野生動植物の獲得にあたって

動植物を獲得・採取するにあたって、獲物に合わせた多様な道具と技術が用いられる。また利用動植物も多様な森林区分から獲得される。成人男性を中心に労働投入がなされ、男女、年齢によって労働投入の形態が異なる。動植物の獲得に際しては、さらに季節に合わせた生態学的な戦略と家庭生計に対する経済的な戦略、他家庭に対する社会的な戦略が行なわれている。

② 村落内での”消費” —食物摂取から見た野生動植物の消費—

食物摂取から見ると植物源に対して動物源が多く利用される。食物選択としては哺乳肉の重視、次いで魚類、野生植物、最後に栽培植物の軽視が指摘できる。季節に合わせた食物の選択がなされる。栄養面からみると市場からの食物が若年層において重要さを増しつつあるが、全体的には森からの野生動植物が重要なカロリー源となっている。

③ 村落外での “消費” —マーケットでの販売より

野生の動植物の販売はイノシシ肉、魚を中心に狩猟採集民にとって重要な現金収入となっている。またマーケットの需要により、野生動植物の獲得方法に社会的・生態学的変化をもたらした。つまり社会的変化としては動植物の分配の後退。また、生態学的変化としては、狩猟の対象にならなくなった動物、重要性を増す動物が存在するという変化である。

・ 考察／今後の課題

考察としては、以下のように言える。①エネルギーのインプット・アウトプットの面では、成人男性に限らず、男女幅広い年齢層で労働投入されている。森からの動植物摂取、市場からの購入食品摂取では前者のほうが重要である。②動植物の消費に当たっては村での消費＝食と、村外での消費＝収入で前者の方が重要である。③森、村、マーケットの3点をめぐる動植物、労働力、お金の移動が現地住民の野生動植物利用に影響を与えている。

今後は新たに伐採道路沿いへ移住したシハンを対象に、森林資源の減少のなかでどのような野生動植物利用を行なうのか、どのような変化が現れるのか比較調査を行なう予定である。